

## 谷川雁における詩と革命

—コンミュニョンの場所と日常生活—

伊藤 洋典

### はじめに

谷川雁は詩人について次のように述べている。

詩人とは何か。

まだ決定的な姿をとらず不確定ではあるが、やがて人々の前に巨大な力となつてあらわれ、その軌道にひとりびとりを微妙にもとらえ、いつかその人の本質そのものと化してしまう根源的勢力……花々や枝を規定する最初のそして最後のエネルギイ……をその出現に先んじて、その萌芽、その胎児のうちに人々をして知覚せしめ、これに対処すべき心情の発見者、それが詩人だ。

このような人間が保守的な世界に一票を投ずる可能性があると考えることが二重に困難なことである。第一に古くなつてしまつた力は根源的ではありえない。第二に根源的でないものは創造的ではない。だから進歩的なものに「尾をふる」者は―詩人ではない、ということも成り立つ。<sup>1)</sup>

革命詩人と呼ばれ、来るべき世界の姿をメタファーに満ちた詩でもって表現し、また多くの散文を通じて、さらには政治的活動を通じて訴えた谷川雁の待望した世界は、しかしながら、ついに実現することはなかった。谷川は一九六〇年に「瞬間の王は死んだ」という言葉とともに詩作をやめ、また数年後には散文の発表や政治活動もやめ、表舞台から消える。谷川の待望した世界がマルクス主義的な社会主義革命を基底に据えていることは周知の通りであるが、しかし、同時に谷川の目指した世界は、「村」「コンミュン」「共同体」「農村」「故郷」などの、あながちメタファーとばかりともいえないような、しかも、日本の伝統的な社会を思わせるような言葉も用いて表現されており、その内実は何であつたのかは直ちに明瞭というわけではない。筆者は以前、谷川のこうした共同体像に関して、それを「『村』的共同体」という言葉で表現し、それが現実社会をトータルに批判するための、抽象的なユートピ的な共同体像であり、それがユートピア的であるがゆえに、かえって運動の求心力を持ちえたと論じたことがある。その抽象性は、同じく「村」的な共同体像を提起した石牟礼道子と比べても際立つた特徴であつた。しかし、社会をトータルに批判するという視点は、高度経済成長期にはそれ自体が現実から遊離していくことになる。<sup>2)</sup>

このような議論を踏まえて、本稿で問いたいののは、谷川が待望した世界が実現しなかつたのは単に高度経済成長期だつたからというだけの理由ではなく、もっと本質的な理由があるのではないのかという問いである。経済成長によつて社会が豊かになり、誰も革命に対する関心を失つたというのは、むしろ、無視できない理由ではあるだろ

うが、谷川の「挫折」には、谷川の主張に内在した、もう少し異なった意味があるのではないだろうか。いうまでもなく、谷川は稀代のオルグとしてさまざまな政治活動を主導してきた。が、その運動のほとんどが谷川の求めたコミュニケーションなるものを結実させることなく終息した。このような谷川の「挫折」には、その運動のおかれた社会的背景とは別に、谷川の論理の中に理由があるのではないか、そしてその理由を辿ることは、ある種の共同体を指した思想と運動の課題を探ることにつながるのではないか。その課題を、谷川の詩の論理と運動の論理に見出すというのが本稿の目的である。

谷川は、まず詩人としてその名を知られた存在となったが、戦後の詩が、敗戦、復興、高度成長といった戦争・戦後体験を出発点にした社会的動向と無縁ではなく、谷川ら戦争体験を経て戦後に活動を始めた詩人たちは政治体制の崩壊を経験し、その中で現れる精神の荒廃も新たな秩序形成の可能性も身をもって感じたことであろう。いかなれば、大きな秩序の崩壊と混沌、そしてその中からほの見える新しい世界の予感、こういったことを感じたであろうことは想像に難くない。吉本隆明が詩について、「現在しえないものへの憧憬」といったのも、新しい世界への予感と同じ意味であると捉えていいだろう。<sup>4</sup> 新たな社会を求める心性は、揺れ動く秩序の中に可能性のひらめきを見出そうとした、あるいはそれを求めるエネルギーを感じたというのもまた想像に難くないところである。しかし、やがて日本の秩序は彼らの期待とはまったく異なった方向に進んでいくこととなった。その中で、谷川は筆を折る道を選んだのである。

このような問題意識と背景を念頭において、ここでの問いをもう少し具体的ににして、本論に入っていくことにする。ここで着目したいのは次のような吉本隆明の発言である。

かつて吉本隆明は、九州での活動の後、東京に出た谷川雁が労組と採めたテック・グループ（東京）の後援で講

演会を開き、そこで谷川雁の活動を評したとき、谷川の思想や活動の弱点として「日常性」を挙げた。たとえば、谷川の詩は一般に難解と言われるが、それは比喩を多用する手法に由来する。このような手法について、吉本は「暗喩の連続的行使によって詩を成り立たせている谷川さんの方法の根底にあるものは、おそらく日常性を拒絶している、あるいは日常世界から拒絶されている、あるいは日常世界を拒絶することを強いられている、そういう生き方だと思っています。」と述べている。<sup>5)</sup>この弱点は、谷川の労働運動や政治運動にも当てはまり、吉本から見ると、何でもない日常にはとんでもない深淵が潜んでいるのであるが、谷川はその日常性を自らの思想にくり入れていなかったことが、彼の指導した労働運動が結局は挫折した原因であると指摘している。吉本は、そもそも労働組合の役割は労働者の生活権の擁護であり、それ以上のものではないとして、この生活という次元を谷川は運動の論理に組み込むことができていないというよりは、むしろ自らの社会変革の構想が、その普通の生活と対立してしまっていると論じている。

吉本のこの指摘は大きな意味を持っているといえる。吉本のいう日常性は、「日常性—今日も寝て、そして起きて同じように顔を洗って、歯を磨いて、それでどうするというような」事象を指すが、要するにルーティン化された生活の論理である。この「普通の生活」に視点をおいて政治運動や労働運動の意味を考えると、吉本の基本的な態度である。このような日常性の重視という態度は、吉本のこの講演（一九七二年）の少し前の一九七〇年に高島通敏が『日常の思想』という、筑摩書房の「戦後日本思想体系」の一冊として編まれたものにも見られる。<sup>6)</sup>高島の問題意識は、日常性の中に運動が根付かない限り、運動は上滑りの運動にしかならないがゆえに、人々の日常性と運動の結合をどうやって作り出すかというものであった。言い換えると、人々を行動に立ち上がらせるには、人々は日常性を捨てて理念に走るのではなく、日常性の世界に足をおいて、そこから立ち上がらせることが必要だとい

うことである。<sup>(7)</sup>

これらはいずれも、理念や思想から社会変革や運動を考えるのではなく、むしろ日常性という「普通の生活」に視点をおいて、その日常にとって有意味かどうかという観点から課題を考えると、態度であるといえる。一九七〇年代における日常性という視点の発見は、何が現状を現状たらしめているのかという問題意識の現れであり、それはなぜ人々は立ち上がらないのかという問題意識と表裏である。それは戦後の政治運動や労働運動の中で現れた理念や思想の有効性が問い直される中で出てきた態度であるといえる。中森美方は谷川が筆を折ったのは、谷川の描く民衆像が現実と大きくずれてしまったことをあげていた。<sup>(8)</sup>つまり可能性の表現としてあまりに先鋭化した民衆像は、平均化したサラリーマンのような民衆とは乖離が大きくなってしまったことである。谷川の民衆像は、谷川の夢の中で完結するしか存在しえないのである。このような見方も、先の吉本と同様、日常性の捉え損ないが結果的に理論の現実乖離をもたらしたということであろう。

しかし、吉本がいうような、日常性を組み込むというのは、ではどうすればよいのか、あるいはよかったのか。現実との対峙の仕方の問題があったのか。現実乖離は、単に平均的人間を無視して、先鋭化したから生じたのか。しかし、そもそも谷川は、それほど日常性を無視していたのか。来るべき世界を夢見た詩人は、日常性というものへの恐ろしさを十分知っていたのではないか。たしかに吉本がいうように、日常性を組み込むことには失敗したかもしれないが、逆にいうと、なぜ組み込めなかったのか。このような視点から、谷川の詩作や政治活動を捉え直して見ること、谷川のコミュニケーションの思想が挫折した理由の一端が見えるのではないか。このような問いをここでは追求していく。

その前に、日常性という視点とはどのような視点か。まずそこから整理しておこう。

## 一、日常性という視点

吉本は谷川を「日常性」という観点から批判したが、その批判は、すでに述べたように、労働者の生活の擁護という、当然の主張に対して、谷川が自らの構想の実現のために対立してしまったことを挙げていた。つまり吉本の批判は、谷川の理念の論理が労働者の普通の生活と対立し、むしろそれを阻害する形になってしまった点に向けられている。この普通の生活が日常性というものであり、重要な点は、日常性という視点が組み込まれているかどうかである。本稿ではこの日常性という視点から、谷川の主張を再検討するが、ここでの狙いは、谷川の論理は、日常性という基盤なしには成り立たないものであった―吉本とは違った意味で―こと、そして谷川もその基盤を求めていたことを示すことである。それが、その論理の中にこの時代の政治的思考ないしは思想における課題が明瞭に読み取れることを示すことにつながると考えられる。

では、谷川の思想を検討するにあたって、日常性をどのように概念化するという点に関して述べておきたい。吉本がいうように、それを日常的なルーティン化した生活という形で捉えてもほんやりしたままであるので、ここでは、これまでのさまざまな思想的、哲学的な日常概念を振り返って、差し当たった概念化をおこなっておきたい。ただ、日常性という概念は極めて多岐にわたる過大なテーマであるので、行論上、必要な限りに止めておきたい。

日常性という概念を考えるとき、大方の出発点としては、フッサールの「生活世界」(「ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学」という概念が想起されるであろう。学的世界が成立する前提としての生活世界というフッサールの捉え方は、抽象的世界と対比される具体的な日々の生活の基盤となる世界を捉えたものである。フッサールは、ガリレイによって数学的に表現された世界に関して、「ガリレイのもつて、数学的な基底を与えられた理念

性の世界が、われわれの日常的な生活世界に、すなわちそれだけがただ一つの現実的な世界であり、現実の知覚によつて与えられ、そのつど経験され、また経験されうる世界であるところの生活世界に、すりかえられているといふことは、きわめて重要なこととして注意されねばならない。」と述べている。<sup>9)</sup> また「あらかじめ与えられている生活世界の存在意味は、主観形成体なのであり、学以前の経験する生の所産なのである。その生において、世界の、しかも、それぞれの経験者にとつて現実に妥当しているそのつどの世界の意味とその存在妥当性が構築されるのである。<sup>10)</sup>」フッサールの「生活世界」という概念は、自然科学的に確定された世界に対して、日常生活の基底性と相互主観性を主張するものである。このような人々の反省以前の生活世界は、その後の哲学ではハイデガールの *Das Sein* の世界である日常生活世界あるいは頹落した公共世界という捉え方に引き継がれた。しかし、ハイデガーの場合は、日常生活における人間は、「世界内存在」として表現されているが、そこには、本来的あり方と非本来的あり方が区別されて存在している。非本来的なあり方は、ハイデガーにおいては克服されるべき世界として位置づけられる。一方でフッサールの場合はそのようなことはない。フッサールの科学的認識以前の世界という意味でいえば、アルフレッド・シュッツの生活世界論が後継の位置に立つ業績であろう。<sup>11)</sup>

シュッツは、日常生活を前科学的な生活世界として、「人びとがいつものとおり決まったように繰り返しながら関与する現実の領域である。日常生活世界とは、人がそのなかで自らの身体をとおして作用することによつてそれに介入し、それを変化させることのできる現実領域のことである。」<sup>12)</sup> という。したがって、この世界は「私」の身体を通じて「ここ」という空間を起点として形成されることになるが、しかし、空間それ自体は段階的な複雑性をもっており、また時間も生物的なリズムから社会的な時間などが複雑に絡み合っている。身体と空間という関係でいえば、オットー・ボルノーの空間論（『空間と人間』）もこうした流れに位置するものであろう。このような現象

学的日常世界論とは別に、重要なものとしてアンリ・ルフェーブルの「日常性批判」がある。ルフェーブルはマルクス主義哲学の観点から、すなわち疎外という観点から日常性を批判的に検討する視点を提供している。ルフェーブルの議論においてここで強調したいのは次の点である。ルフェーブルの議論の特徴は、さまざまな技術が生活に浸透し、また分業の進展が生活を分断することで曖昧になった日常生活とは何かという問題に関する社会学的分析だということである。<sup>13</sup> この生活の分断の中で、人々の疎外状況は深刻化する。この日常生活の解明と統一性の回復がルフェーブルのテーマとなるが、本稿との関連でいえば、階級意識の変化に関する言及に注目しておきたい。ルフェーブルによると、生活の分断のみならず、日々の生活の安定・安寧への関心の増大は、階級意識が相対化をもたらずが、それは階級意識が教導概念ではなくなるということであり、この階級意識の相対化は、谷川雁が闘った課題でもあった。ルフェーブルの議論において重要なことは、階級意識は民衆の日々の欲求の中で曖昧で不確かなものになるということである。もはや誰と闘っているのが不透明になるのである。

他方で、日本に目を移すと、本稿で注意しておきたいのは先の高島ほかに、彼に先立つ戸坂潤の議論である。戸坂は日常性において行われる価値の序列づけや日常茶飯の重要性などの指摘を行い、日常性もつ大きな意味を論じている。<sup>14</sup> 戸坂の議論は高島にも影響を与えており、再度高島の議論について確認し、もう一人安藤丈将の議論を参照しておきたい。

高島通敏は一九六〇年の日米安保闘争を総括した文章において、丸山眞男や竹内好らのいわゆる「市民派イデオログ」と呼ばれた人々が安保後に時局的発言をしなくなった理由について、「非日常的」運動を担う「境界人（マージナルマン）」として生きることは、日常生活が全面的に復帰する高度経済成長期にはきわめて困難であることを指摘している。社会という日常を生きる人間にとって社会の外に立つという非日常を要求するのは、あまりに酷で



あるがゆえに、彼らの高すぎる精神主義的要求は機能する場所を失ったというのである。高畠のこの指摘は、逆にいえば、市民の日常に政治は根付いていないという問題提起として捉えることができる。いふなれば、どうすれば市民の日常に政治的意識は根付くのかという問題である。市民の日常から新しい世界は生まれるのか、体制的価値を超える何事かが生まれることはありうるのか。こうした問題意識の上に高畠は次のようにいう。

現在の日常生活のなかに人間の豊かな原資が潜んでいることを信じるか否かの分かれ目であり、日常生活の変革が運動の過程のなかで並行的に行われうることを信ずるか否かの分かれ目であり、政治革命と機構の変革によってある日突然に日常生活が人間的に塗りかえられうるという神話を否定するか否かの分かれ目なのである。今日われわれは否応なしにこの分かれ目の前で選択に立たされている。<sup>16)</sup>

いうまでもなく高畠は日常生活のなかに人間の原資が潜んでいるという立場を選ぶことになるが、これはまた普通の市民が日常生活を送りながらも、時として権力批判に立ち上がる条件の模索にもなる。これが丸山らと違う点は、高畠は徹底的に日常にこだわり、日常の外ではなく、日常のなかに運動の条件を探っていったことである。あべき市民像を啓蒙的に提示するのではなく、普通の生活を送る市民のなかに、日常を超える条件がすでに内在しているのではないかという問題提起である。

このような問題提起は今日的視点からみると、どうであろうか。安藤丈将は、『ニューレフト運動と市民社会―「六〇年代」の思想のゆくえ』<sup>17)</sup>において、安保闘争の後に生まれたニューレフトを論じて次のように整理している。すなわち、ニューレフトは安保闘争を失敗と位置づけ、主体的行動の必要性を訴えたが、運動はその後、日常性に

おける生き方の問い直しへと展開していった。しかし、問題は、日常性の問い直しにおいて、自己変革と社会変革が結びついていたが、運動の大衆的支持が消えていくと、社会変革という次元が消失し、自己変革だけが残ってしまったことであると指摘している。すなわち日常が社会変革とのつながりを失い、自己のみを問題にする場となってしまったのである。これは、社会変革が個人の力の及ばないところに行ってしまったという意味では、政治的疎外の現れであるともいえるし、同時にまたすぐれて今日の問題であるともいえる。日常的個人と社会との回路が消えた時、高畠の問題提起もまた隘路に至る。

さて、このような日常生活論において行論上確認しておくべきは、現象学的日常生活論がいうように、日常世界とは過去でも未来でもなく、「いまここ」の世界であるという点である。それとともに、あるいはそれ以上に重要な点として、ルフューブルの日常生活論において見られる、日常生活の意味の曖昧化を確認しておく必要がある。この日常生活の曖昧さは、われわれの生活がもはや個人的次元と社会的次元という二つの明確な領域の統合としてではなく、労働、余暇、家庭の分離において関心の対象が分散したままの状況として存在しているということである。階級意識はもはや労働者の拠り所ではなくなりつつあるという状況にあるということである。このような日常生活論の有効性は、われわれの生活次元の分散と意識の分散を相関的に捉え、階級意識という抵抗の拠点の脆弱性を炙り出すことである。

このように、「いまここ」の生活の場である日常生活の場と、曖昧化した日常という視点を確認して、谷川の議論を見ていこう。あらかじめ見通しを述べておくと、ここでは谷川における階級意識と日常生活の相剋を見ていることになるだろう。

## 二、谷川における日常性

谷川に関しては、先の吉本の批判にも見られるように、詩と散文のいずれにおいても、日常性というところからはかけ離れたイメージで捉えられることが多い。入澤美時は、谷川の思想について、「谷川の文章からは「日常というものの匂い」が漂ってこないのである。」と述べ、労働運動にしても市民運動にしても、つらいのは「日々の積み重ねと繰り返しかえしである。それ以上に、終息をどこにもつていくかが、一番つらいのである。…人びとの生活、暮らし、日常、行く末が関わるからである。」と述べている<sup>(18)</sup>。谷川の文章にはこうしたことに触れるところがないということは、谷川の言葉は日常とは異なる次元において発せられているということになる。

谷川についてもっとも多く論評を書いたと思われる北川透は、谷川の詩がメタファーに満ちている点を指して、「その徹底した隠喩の連続は、詩の世界を、事実の認識と物のように動かない日常的な意識から、極度に自律させたいという願望にもとづいている」と述べる<sup>(19)</sup>。メタファーは現実的・日常的な言葉の秩序を破壊し、反現実を作り出すという。詩の言葉が日常の言葉ではないことはその通りであろうし、谷川の詩が反現実を作り出すインパクトをもったものであるというのもその通りであろうが、しかし、日常という次元がもつ意味については、否定される次元という以外にはあまり触れていない。谷川の言葉がそもそも日常という語感を拒否するのかもしれない。

たしかに、入澤や北川が言うように、谷川の詩も散文もここに日常の生活臭を感じるなどということはない。ただ、先にも少し触れたが、谷川には日常への眼差しがまったくないかといえ、そうとも言い切れないのではないか。たとえば、谷川は、「詩と政治の関係」という評論において、石川啄木の詩について次のように述べる。

彼が主観的には絶縁しようとおせりながらついにそのきずなから逃れることのできなかった村と大地をすこしはにかみながら歌うとき、日本の詩と抵抗のよって立つべき基盤をはからずも探りあてていたのである。

\*

もし抵抗から生活の内容をみたしている日常性が失われるならばそれは、概念化におちいり、歴史性が失われるならば末梢的なモダンイズムとなる。<sup>(20)</sup>

ここで谷川が「日常性」という言葉を使っているからといって、彼が日常性について何かを語っているといったわけではない。しかし、この啄木評価はかなり明瞭である。村と大地、そしてそこでの日常性が抵抗の基盤となるという構図である。他方で、メタファーを多用する谷川にとって、その詩で表現されるのは、日常茶飯の事柄とはまさに正反対の事柄であるといってもよいだろう。北川透の言葉をもう一度引いておこう。

その徹底した隠喩の連続は、詩の世界を、事実の認識と物のように動かない日常的な意識から、極度に自律させたいという願望にもとづいている。いわば、隠された共同体意識を現実化するために、逆に現実的的日常なことばの秩序を破壊し、現実の生活過程の極北にある反現実界として、作りださなければならないのだ。<sup>(21)</sup>

たしかに、谷川が日常性をそのまま語るといふことはないが、しかし、谷川が石川の「内奥にある『故郷』にはうたれる」というとき、この「故郷」とは何か。谷川は、この故郷を「村と大地」といい、この言葉によって石川は、「日本の詩と抵抗のよって立つべき基盤をはからずも探りあてていたのである。」と述べる。<sup>(22)</sup> 北川的に捉えれば、

これこそ「隠された共同体意識」であり、「現実の極北」にあるものということになるが、しかし、「故郷」や「村と大地」などという言葉は、誰もが接近できる日常の言葉である。したがって谷川の議論は、この日常の言葉を通じて、非日常の、隠された共同体意識に行き着くという構造になっているといえる。いうなれば、日常の用語を通じて、「到達すべき非日常世界」へ至るのである。谷川の「東京へゆくな」を見てみよう。

東京へゆくな

ふるさとの悪霊どもの歯ぐきから

俺はみつけた 水仙いろした泥の都

波のようにやさしく奇怪な発音で

馬車を売ろう 杉を買おう 革命はこわい

なきはらすきこりの娘は

岩のピアノにむかい

新しい国のうたを立ちのぼらせよ

つまずき こみあげる鉄道のはて

ほしよりもしずかな草刈場で

虚無のからすを追いはらえ

あさはこわれやすいがらすだから  
東京へゆくな ふるさとを創れ

おれたちのしりをひやす苔の客間に

船乗り 百姓 旋盤工 坑夫をまねけ

かぞえきれぬ恥辱 ひとつの眼つき

それこそ羊歯でかくされたこの世の首府

駆けてゆくひずめの内側なのだ<sup>(2)</sup>

この詩で、谷川は「東京へゆくな ふるさとを創れ」という。ここで「ふるさと」とは何か。それは語らずとも、東京の反対側、「鉄道のはて」羊歯の覆いの下には、「新しい国」があるかもしれない、という印象を読む者に与える。ここではたしかに、東京に対比される別の共同体が、いわば幻視されているといえる。この幻視が「ひずめの内側」でもある。このようなメタファーは、吉本隆明がそれこそ非日常の最たる例とした挙げたものである。たしかにこれは非日常的なメタファーであろう。が、ここには谷川にとって「ふるさと」とは何であったかということが比較

的よく現れているといえるのではないか。つまり、「ふるさと」とは、これがもしメタファーであるとすると、メタファーでしか語れないのである。いふなれば、「あるけど見えない」ものとしての「ふるさと」という場所である。この「ふるさと」という言葉によってわれわれは日常親しんだ世界を想起するが、むろん、それは唱歌の「故郷」などのような懐古趣味ではないことは明瞭である。非日常のまだ見ぬ世界（ふるさと）がメタファーによって示される。「ふるさと」自体がメタファーとなっているともいえる。

ところで、北川透は、この詩について次のようにいう。

この詩には「水仙いろした泥の都」とか「波のようにやさしく奇怪な発音」「きこりの娘」「岩のピアノ」「ほしよりもしずかな草刈場」「苔の客間」「羊歯でかくされたこの世の首府」とかいう村落共同体を象徴するような幻想的な詩語が確実に計算されてつかわれている。ここからは農民の無制限に苦しい労働過程も、一にぎりの土地にしがみつくと私有意識も、独占資本の収奪の対象となつて、新たな階級分化を起こしている現実も、それらすべての農民的世界は、きわめて意図的に排除されている。この詩人は、農民的現実を描くことを意図しているのでなくて、ほくらにとつては、幻としてしか映ることのない村落共同体の原意識とでもいふべきものを詩的に定着しようとしていいるのだから、それは当然である。：（中略）：谷川が「東京へゆくな」というのは、だから、もちろん実体としての東京でもなく、それに対する地方でもない。自己の意識空間に広がっている地方、辺境を、主体のよりどころにして、「ふるさとを創れ」という形で、それを心情の連帯の基礎にしようというのである。<sup>(24)</sup>

このような解釈に異を唱えるつもりはないし、谷川の詩がメタファーによってしか表現されないものを表現して

いるということは認めつつも、しかし、もしかしたら、谷川は本当に「東京にゆくな」と考えていたと想定したらどうであろうか。<sup>(26)</sup>この詩とほぼ同じ時期に書かれた「東京の進歩的文化人」と題された散文があるが、ここで谷川は、東京と地方の拮抗関係こそ民主主義にとつて意味のあることであるといっている。

これまで時空を超越したかのごとき階級論の横行に対して時間的契機Ⅱ世代の概念が注入されたことは、たしかに最近の収穫である。しかし、この見地を単純に推進しても当然に空間的契機、たとえば中央と地方の関連が問題にならないならばならないにも拘らず、この問題を女中部屋に押しこめておきたいというような無意識の作用を私は都会の進歩的文化の中に強く感じる。つまり文化全体の巨視的展望から離れて、地方文化への同情深い問題意識という風に化けてしまうのだ。世代論はすでに動かすことのできない歴史的位相に関わっているので、ややもすれば静止した姿勢で語ることを許すけれども、空間的契機はさらに強く自己の生活の変質を迫る力をもっている。<sup>(27)</sup>

この文章は谷川の東京訪問に際して書かれたものであるが、ここでの東京対地方という構図はかなり具体的だ。谷川は東京がもつ中央意識を批判しつつ、東京もまた一つの地方に過ぎないという。そして、このような自分の指摘について、

しちくどいようだが、このときに「そうだ、そうだ。」と手をたたいてもらっては困るのだ。：しらぬひ筑紫のはての若造の辻説法にころりと参るような弱い神経では、それを裏返せば辺境のさびしい町でいささかの才気を持ち東京の空にあこがれている青年少女とすこしも変わらぬではないか。東京組は断乎として私の意見に反対すべきである。静止的な反



対ではなく、前進的な反対をすべきである。首都としての機能をまっこうから振りかざし、日本列島ごときは楽々と掌中に収め、レモン汁のごとくにそのエキスをしほり出すべきである。中央と地方におけるこのような拮抗関係が作りだされ、<sup>(28)</sup> こそ、民主主義のつるべは円滑に泉を汲むことができるのであり、われわれの場の概念は完結する。

と述べる。

このように、中央とか地方かとの意識は否定するものの、それでも東京や地方という言葉自体はかなり実体を伴ったものとして捉えることができるのである。このような空間的認識が生活の変質を迫る力をもっているというのである。

もう一つ。この文章では、谷川は東京での人々の会話と百姓女の会話はどこが違うのかと述べ、次のようにいう。

彼女ら（百姓女⇨引用者）の会話は必ず自分たちの帰属する集団へ帰ってくる。その集団に絶えず触りながら、彼女らは発言している。しかし、ここでは何も無い。電波のような神経の波しかない。<sup>(29)</sup>

地方には帰属する集団があり、本物ではないかもしれないが、コンミュニョンらしきものがあるともいう。このような認識を前提として、谷川はこう述べる。

懐疑派諸氏は答えたものだ。そのような状態へ進もうとすれば、なるほど組織を必要とするしかし、この組織が果たして有効なものになりうるかどうか、また成功しても官僚化されないといい保証はない、と。——私をして言わしめれば、

そのような組織への恐怖自身が組織への過大評価であり、エネルギーよりも組織を重視する態度であり、ついには官僚化をうむ原因である。万難を排して常にエネルギーの側に立つという決意、それが全てを決する。

…革新政党か、労働組合か。いや、それらとからみあいながら根源にあるのは全国津々浦々のひそかな無形のエネルギーではないか。だから草深い町や村の若い勢力が一つまた一つとたおれてゆくときが来れば、それこそわれわれの晩鐘なのだ。<sup>30)</sup>

ただし、留意しておかなければならないのは、谷川は「地方」という言葉において、地理的空間としての中央、地方を前提とした、いわゆる中央対地方という問題として捉えているのではないということである。「地方―意識空間として」において、このような地理的な概念として「地方」を捉える見方を厳しく批判している。『中央』がなくなれば、『地方』もまた消失するか。そして人間は『存在の機軸』を求めてさまよわねばならないか。ちがう。『中央』が無化されるとき、初めてひろがってくる意識の野が、それが『地方』である。<sup>31)</sup>この論考での谷川の論理は、中央対地方という対立を地理空間の観点から捉えることへの批判であるが、その主眼は、「地方」を中央との対立の中で考えることへの批判である。つまり、このような対立に寄りかかった捉え方ではなく、自力で立つ場所としての「地方」が確立されなければならないということであり、単なる価値の転倒は、所詮はその価値序列を前提とした転倒に過ぎず、新たな価値の創出ではない。中央の鏡として地方があるのではなく、自立した存在の場所というあり方を考えなければならぬということである。その意味では、これまで論じてきた「場」としての地方という捉え方と異なるものではない。

谷川の議論は、民衆のエネルギーが結集する、根拠地としての「故郷」を展望するという形になっている。そこ

がやがて社会変革と抵抗の拠点となることが期待されているといえる。したがって、谷川の「故郷」は民衆世界のエネルギーの表現の場でもある。その「場」は、全国津々浦々の草深い町や村での百姓女の会話の中にその一端を見せているのである。谷川が述べていたように、これらの町々こそ革新政党より労働組合よりさらに根源なのである。谷川は、結核を患って阿蘇の病院で養生したとき、無名の民衆の優しさに触れる。そこで

だが僕に愛の原型を示したのは形而上的観念ではなく、特殊部落民であり、貧農であり、娼婦たちであり、村の法則だった。彼等は一様に指している。何を。共同体（コミュニティ）を。はるか遠い記憶に沈んでいる村を。  
原詩（ウルポエジイ）を。<sup>(2)</sup>

と感慨を抱く。これは谷川のみた村の世界であるかもしれないが、しかし、ひとり谷川にとつての世界というだけではなく、民衆にとつての「いまここ」の世界でもあると考えていた、つまり谷川は、村に存在する「いまここ」の世界に、帰属の場があり、エネルギーがあると考えていたとみることができる。だからこそ、谷川は、民衆の生活の根幹にある「生活語」、「表現の核心が無」であるような民衆の世界こそが革命のエネルギーの発信地となると考えていたのである。それは、いかにも先鋭的で、また谷川の夢の世界であるかもしれないが、谷川が民衆の生活の場にこそ変革の始点があると考えていたことは間違いない。このような東洋的村とか故郷とか村とかの用語を、谷川がマルクス主義的革命観に繋げるのは、変革は常に、生活の基盤である「場」を必要としており、「場」なくしてはエネルギーもなく、したがって革命もないという論理を前提としていないからではないか。民衆が帰属する場があれば、その場を足掛かりにして、また帰属する場を失った者は、そのような場を創出することを通じて、革命

の起点を作り出すのである。

つまり、「いまここ」の世界が革命には必要であり、またその世界を共有すればこそ生まれる連帯感に期待を寄せるのである。

僕は歴史学者でもなければ社会学者でもないが、すくなくとも感性の領域で共同体の破片と記憶は農民はむろんのこと大部分の労働者にも今なお生きていると主張する。日本文明の一番下の階級に生きていると主張する。そしてそれを破壊することが真の反封建闘争でも何でもなくて、むしろこの破片と記憶をめざめさせて新しい共同体の基礎にしなければならぬと主張する。このような見地に立たなければ農村で生活し、農村で詩を書くことを無意味にしてしまう或る一点が存在すると主張する。<sup>(33)</sup>

非農民として自らを認識した「詩人」としての谷川が、初めて自分のなかに詩を自覚したという二行。

おれは村を知り 道を知り

灰色の時を知った<sup>(34)</sup>

「谷川の「村」は、一つの「幻影」として現実を超越しているからこそ、反現実の力をもったということもいえるであろう。また谷川の描く農民たちは、すでに前衛的であり、平均的な民衆とはいえないということもある。しかし、ここで注目したいのは、どんなに先鋭的であろうと反現実的であろうと、それが一つの力となるためには、

その反現実の幻影が追求される「場」を必要とするということである。この「場」によって、幻影は「いまここ」の現実の存在となるのである。この「場」づくりが谷川の後「サークル村」や「大正行動隊」などの活動につながるのである。<sup>(35)</sup>

### 三、「場所」のありか

谷川は、詩人としての活動の一方で、一九五八年から九州で「サークル村」という文芸誌を出版する活動をしてきた。この活動についてはすでに論じたことがあるので詳細は触れないが、当時は全国的にサークル活動が盛んであり、文化活動を梃子にして、日本社会の民主化ないしは改革の一端を担おうとしていた。谷川はこのような活動の中心人物の一人であった。「サークル村」という名称が示しているように、この運動は「村」という名の新しい共同体であるコミュニケーションを目指した文化運動であった。その担い手は主に、谷川雁や森崎和江、石牟礼道子といった書き手のほかは、ほとんどが共産党系の労組に属する企業労働者や炭鉱労働者であった。その構成員のあり方からしても、この運動が文化運動と政治運動の軋轢に苦しむこととなるのは当然の成り行きであったともいえるが、谷川は、こうした性格の異なる運動を連続した運動として展開し、三池闘争、安保闘争、大正炭鉱の闘争（大正行動隊）といった活動を展開していった。そして、それらがすべて終焉を迎えた時、谷川は一九六五年これらの活動をすべて離れる。すでに詩人としての活動は一九六〇年に自ら終焉宣言をしていた。つまり、ここで谷川はひとまず詩人でも、革命家でもなくなるのである。

谷川は、まさに走り抜けたというべき短い期間の活動の間は何を目指したのか。もちろん、谷川はコミュニケーションを

目指したのである。しかし、本稿では追求するのは、そのコンミュニンの実態よりも、コンミュニンを求める思想が直面する問題とは何であつたかということである。その問題を本稿では「場」のありかとして考えていく。つまり、コンミュニンの思想は思想として完結することではなく、そのコンミュニンを実現するための「場」を必要とするということであり、その「場」を獲得することこそが真の課題として立ち現れるということである。言い換えると、これまでみてきたように、谷川の詩が、「村」や「故郷」といった暮らしに根ざした用語を用いながらも、同時にそれらは抽象的なメタファーとして機能し、現実と反現実の（あわい）を表現するものとなっている。これらの言葉によって、現実の「村」や「故郷」と同時に、はるか遠い記憶の中に沈んだ「村」や「故郷」の記憶が幻視される。これがメタファーでもある。このメタファーの世界こそいわば「原点」なのである。この「原点」は、人びとの生活と無縁のものではないが、しかし、すでに「そこにある」という類のものでもない。それは現実の「村」や「故郷」を足場としながらも、そこを突き抜けた次元に現れる共同体、それがコンミュニンであるが、そのコンミュニンは、現実の「村」や「故郷」という「場」を必要とするのである。では、谷川は、その現実の「村」や「故郷」をどこに見出そうとしたのか。

このあたりの事情を別の観点から述べておくと、次のようにもなる。谷川の論理が「村」といった馴染みの深い帰属する場を指し示す一方で、他方では、人びとは暮らしの中からその場を突き抜けて、新たな次元に到達することが期待されているということは、このような新たな次元を指し示す存在は、日本社会にどっぷり浸った存在ではなく、日本にいながらにして、日本への帰属を相対化できる存在であるということになる。このような視点を明示しているのは、独特の二重構造論である。谷川は「日本の二重構造」という文章において、日本の二重構造について、日本文化の特徴として「舶来」と「国粹」、「本音」と「たてまえ」などの二重性に表れている所屬意識の二重性を

論じている。谷川は「二重所属」や「半所属」などといった言葉を用いながら、日本の統合様式の特異性を論じている。谷川は、マルクス主義的な疎外や柳田民族学の常民という概念を参照しながら、共同体のあり方を議論するのであるが、谷川の共同体は常に疎外の克服を目指したものとして、疎外と表裏の関係に立っている。したがって疎外をどう規定するかによって共同体のあり方も変わってくる。その場合、現状否定の梃子になる疎外もまた辺境の農漁民、流浪のプロレタリアート、特殊部落民、らい病、在日朝鮮人などに表れる疎外へと先鋭化せざるを得ない。中森がいうように、このように先鋭化してくると、時代と谷川の民衆像のずれがでてくることにもなるが、谷川は、炭鉱労働者の運動に現実否定の契機を見出そうとしたといえる。

純粹に考えれば、炭鉱労働者の運動は炭鉱労働者の生活を守るための運動であり、特段、現実否定などの契機などを持ち込む必要はないようにみえるが、谷川はここに自らの思想の現実化を求めたといっている。いかなれば、三池炭鉱や大正炭鉱の運動は、いずれも人員の合理化に対する反対闘争であって、そこでの目標は炭鉱夫の生活保障であったが、しかし、谷川は、とくに、大正炭鉱に関して、安保闘争や三池闘争の敗北の後ということもあり、反体制運動の「掉尾の一戦」として闘った。大正行動隊という直接行動を訴える集団を結成し、労働運動を先導していくのである。この背景についてみておこう。<sup>28)</sup>

大正炭鉱は、貝島、麻生とともに「地方大手」に一応は分類されるとはいえ、大手のなかでは弱小な炭鉱であった。大正炭業における合理化運動は六〇年秋後ごろから本格化するが、このような合理化は、エネルギー政策の転換によって全国各地で進んでいた。この大正炭鉱では経営側からの合理化案（賃金引下げや希望退職の募集など）をめぐって労使の協議が行われていたが、このとき、合理化案に反対し、直接行動を訴えたのが、谷川がオルグした大正行動隊であった。もともと、共産党を除名されたメンバーを中心として結成された「共産主義者同志会」が結

成されており、そこから一九六〇年に大正行動隊が結成され、この行動隊が中心となって、後に（一九六二年）「大正鉦業退職者同盟」が結成され、退職金闘争を繰り広げた。この退職者同盟は、退職者であるにもかかわらず、組合としての適格性を地方労働委員会に認定されており、闘争の中心的な役割を果たした。闘争の目的は明確である。失業保険、退職金、未払賃金の要求が行動の中心である。このような要求を掲げて、会社側、地方労働委員会、九州炭鉦労働地方委員会などを相手に活動を行っている。その間にも、「食いつなぎ資金」の要求があったりしている。要するに、生活保障の意味合いの強い闘いなのである。労働者の生活という点からみるとそれは当然といえざるである。しかし、大正行動隊を中心とする労働運動が長期化し、企業及び銀行側の譲歩を勝ち取り得ないまま時間が過ぎると、「いかにメシを食うか」という問題は当然のことながら重要性を増していった。大正行動隊及び退職者同盟の闘争は、この問題を闘争の中に組み込む形で展開していくことを目論んだ。そうでなければ、この問題は闘争参加者の離脱をもたらすことになるだけでなく、闘争自体が谷川のいう「私有」の論理に飲み込まれることにもなる。このような事情を大正行動隊が発行した『行動隊ニュース』は次のように伝えている。

これまでの闘争がついに破ることのできなかつた壁は、敵の強さではなく、実に労働者がとことんのところ自分の家庭に閉じこもってフタをしてしまうところにあった。このフタを開き、長屋の壁をぶちぬき、新しい集団生活を発見するたに、強制ではなく自発的に、小さなグループから全体へ、たゆみなく一歩一歩進んでいくのではないか。このとき初めて、大正闘争は全労働者階級の関心の焦点となるのだ。<sup>39</sup>

それぞれの生活が成り立つようにすることと、共同の生活が両立するような集団生活を構想する。ここにコン



ミューンへの志向性を見出すことも可能かもしれない。<sup>10</sup>しかし、これがコンミュニオンの否かというよりも、ここで注目したいのは、この闘争は具体的な生活の場を形成する運動でもあったということである。結局のところ、この闘争は労使協議だけでは決着せず、市長の斡旋もあつて、退職金の頭金の受け取りと市設住宅への入居に落ち着いた。退職者同盟を結成したのが一九六二年六月で、この決着が六三年一〇月であるので、一年四ヶ月ぶりの決着ということになる。このような運動を谷川は思想的に「自立集団」と表現したり、「自己解放運動」と表現したりしているが、とにかくも「日本の労働運動に新しい『酒』の一つが醸成されたのだ」ということだけは太鼓判を押しておく<sup>11</sup>と自賛している。谷川の自賛はともかく、この決着において、市設住宅への入居に関しては、それ以外に自力建設による住宅確保が同盟側から追加された。これは市設住宅では絶対数が足りないという事情によるが、同盟はこの住宅建設にかなり力を注ぎ、筑豊企業組合なる組織を作り、住宅建設に当たらせることで生活費の捻出を工夫した。この中で興味深いのは、森崎和江の伝えるところによれば、「同盟は「同盟村」を作り村のなかに生産と労働の場を作らんとした。企業組合の発足はそれへの一段階であつた。自営で闘うのである。」というように、またしてもここで「村」を作り、それを闘いの拠点としようとした点である。

この試みがうまくいかなかったことは森崎和江が伝えるとおりである。谷川がこの住宅建設にどの程度関与したかは明確には分からないが、退職者同盟創設にあたって中心的な役割を果たした以上、ここでもかなりの程度関与したと考えるのが相当であろう。森崎は次のように伝えている。

同盟の闘いは、企業組合による地力建設に集中した。中鶴地区の炭坑住宅を解体する者。その資材を選別する者。運搬する者。住宅建設の敷地を整える者。基礎を打つ者。建てる者。そしてこれらの細かな分担を統括して指揮する者らによつ

て新しい住宅は姿をみせはじめた。何よりも運転資金の調達に、みえぬエネルギーがそそがれた。やがて住宅はひとかたまりになって高台の上に並び、入居者もつきつきに落ち着きを出した。近くに幼児のための保育園も企業組合によって建てられた。……商店や理髪店も同盟員によって建てられた。それらはいずれも数人の人々の生活費の足しになるにすぎなかったが、離職者集団が集団維持の具体的な場を自力でととのえた意味は大きかった。同盟は自力建設で作り上げた住宅の建ち並ぶ丘を、自由が丘を命名した。そしてここを拠点に、まだ残っている退職金獲得の気が遠くなるような闘争を維持せんとした。<sup>(12)</sup>

だが、この闘争は、内部に深刻な分裂をもたらすことになる。このような自力建設や生活再建が着々と進む状況の中で、本来同盟村を作ろうとした目的とどう思想的に整合するかという問題が提起されることになる。結局のところ、生活再建はあくまで生活再建であり、そこにそれ以上の意味を読み込むというのは困難に直面せざるを得ないということである。このような困難が伏在している一方で、谷川はこの闘争に大きな期待を寄せていた。これはこの時期（一九六三年）に藤田省三との対談から伺うことができる。そこで、谷川は、闘争とメシを食うことの一致を主張し、闘争の日常化を説いている。例えばこうである。

職業を基礎として闘争方針をたててゆくのではなくて、闘争ということがメシを食うことと同じ自然的状況となり、したがって『はじめに闘争ありき』という日常生活を構築したい、闘争によって得られないメシはメシではないということなんで……<sup>(13)</sup>

これは闘争の日常化というよりも、日常の闘争化といった方がいいかもれないが、日常の生活を闘争の先にあるコンミュニョンへ近づけようという意図があると考えてよいだろう。このような考え方は先の『行動隊ニュース』の記述とも類似している。が、このような日常と闘争の一致という考え方は、闘争の分裂によって破綻することになる。<sup>(44)</sup>

こうして、谷川の闘争を辿ってみたとき、一九六〇年代前半の安保闘争、三池闘争、大正闘争において、谷川が求めたのは闘争の拠点づくりであったといえる。その拠点が生活の拠点となり、そこに現れるはずのものがコンミュニョンであった。そのコンミュニョンは、私有を乗り越えた共同体であるはずであったが、しかし、そのような共同体を立ち上げるには相当のエネルギーが必要であったことは当然である。谷川は「エネルギー」という言葉を好むが、三池闘争に土着のエネルギーを見出した谷川は、安保闘争と比較して次のようにいう。

三池闘争がともかくにも熱っぽい否定のエネルギーをもって疑似市民主義の壘をひとたびのりこえたのに対して、安保闘争は冷やかな否定のエネルギーによってその城壁を破壊することがついにできなかったからである。ここに二つの闘争のエネルギー本質論的なちがひがある。すなわち三池は坑夫の生産する兵士としての神経反応がコンミュニョン風の共同精神に裏うちされながら、無政府的にエネルギーをあふれさせたのに対して、安保は首都の都市市民としての反応がむしろ無階級的に流出するにとどまった。<sup>(45)</sup>

この三池のエネルギーの出所は、炭鉱で働く労働者の多くが農漁民出身であったということ、また囚人労働や与論島出身たちがいたことで、彼らももっていたのが土着エネルギーである。ここでも前節でみたように、彼らが生まれた辺境には元来大きなエネルギーが内在している。そのエネルギーは、辺境という存在態様に内在しているの

か、それとも疎外という存在態様から生まれるのか、あるいはまた何らかの対立構造（中央対地方などの）のなかから生まれるのかは定かではないが、谷川が常にそこにエネルギーを見出していたのは間違いない。このエネルギーが三池では発揮されたが、安保闘争では都市住民が主体となったがために、このようなエネルギーが見られることはなかったということであろう。

谷川の議論は、革命、階級闘争、疎外、私有、共有といった、いわばマルクス主義的な言説に満ちているが、こういった諸概念を外してみれば、そこに出てくるのは、辺境あるいは全国津々浦々の町々がもつエネルギーへの信頼である。こうしたエネルギーは、自らの生活の場であることを、自らの手で創造するという意欲に裏うちされていなければ出てくるはずのないものであろう。その意味では、谷川のコンミュニンの夢は、詩の世界から現実の世界へと移されるとき、具体的な闘争の根拠としての場所を必要としたであらうし、その表れが三池闘争、大正闘争であつたとみることができると、これらの谷川の闘争はほとんど失敗に終わっているが、それでも、安保よりも三池、三池よりも大正炭鉱というように、次第に運動の視点が生活の場に近くなっていることが分かるだろう。階級闘争とか革命といった目標がなくなるわけではないが、住宅問題などの具体的な生活基盤の改善などへの視点が入ってくるのである。コンミュニンは理念のなかではなく、生活の場においてはじめて意味をもつ理念となるはずである。しかし、現実の過程をみると、夢の実現は遠かつたとしかない。

遠かつた理由は、やはり、生活の場の変革という問題が、共同空間を創りたいという谷川の思いとは一致しなかつたということであり、また同時に革命という次元とも容易には結びつかなかつたということにあるといえる。夢の挫折の外的要因としては、当時の産業構造の変化や高度経済成長による社会構造の変化などが大きく、とてもコンミュニンの夢を受け入れる余地はなかつたといえるかもしれないが、このような外的要因ではなく、谷川の論理

に内在した内的論理をみてみれば、コンミュニョンの場所性は、革命の論理の中に組み込まれるとき、その抽象的論理の中で場所もまた抽象化し、日常性から乖離してしまったという問題があるといってもよいのだろう。退職者同盟の闘いにおいて、彼らが「自由が丘」と名づけた住宅群は、生活の場としても、また闘争の拠点としても機能することが期待された。これがまさしく谷川が求めた拠点、あるいは根拠地であったはずである。しかし、その根拠地の形成過程において闘争は分裂し、谷川の思惑とは異なる結果となるのである。

根拠地となる「場」を求めて闘ったが、ついに「場」を手に入れることができなかつたということになる。大正行動隊が発行した『行動隊ニュース』においては、「蜂の巣城」という言葉も出てきていたが、まさしくそのよきな拠点を求めたのであろうが、蜂の巣城の戦いも終焉を迎えたように、闘いはいつかは終焉する。しかし、日常の生活は繰り返し続くのである。先の藤田との対談において、谷川は日常と闘争を一致させたいと述べていたが、しかし、そもそも、日常を闘争の場にするということは、繰り返しのリズムが基調となる日常において、政治闘争は破壊的な活動として入ってこざるをえないものであり、「いまここ」を重視する日常意識とは相容れない側面があるのは否定しようがない事柄である。逆の観点からいえば、世界情勢や歴史法則から演繹される論理は、自らの身体を軸として形成される日常世界の中では切迫した意味をもちえないということである。

このような日常と闘争のせめぎ合いは、谷川においては十分な注意は払われていない。谷川においては革命の論理が常に先行する。その革命の夢が闘争を引っ張るのであるが、その場は、日常生活を含まざるを得ないというところが、谷川の拠点ないしは根拠地の矛盾点となつて出てくるのである。次のような谷川の文章をみれば、谷川の論理が日常性から乖離した論理であつたことが分かる。

いったい労働組合は何をする組織なのか。経済的向上？ふところがあつたまるのはけっこうだが、市民的しあわせ野郎のなかま入りをしなくてすむには、どうしたらよいのだ。××主義の学校？知的になるのはステキだが、くだらない教師に生涯生徒あつかいされるのがいやなら、どうしたらよいのだ。闘争によるカタルシス？……

だが、労働組合は何よりもまず労働者による、労働者のための、労働者の組織である。それによつて労働者の現在領域を越えようとする組織である。とすれば、それが労働組合という名をもとうが、政党という名をもとうが、コンミュニオンであろうがソヴェエトであろうが、労働者自身にとつて本質的に困ることはありえようはずがない。要するに根源に帰つて労働者運動の組織とはいかなるものかという問が一つあれば足りるのである。…<sup>(4)</sup>

このようなことを述べながら、谷川は、労働者運動の原基体という言葉を使いながら、それは見る者の位置によつて、サンジカリズムに見えたり、サークル主義に見えたり、七色に変化するといふ。その上で、

さて、労働者の衝動、欲望の原基形態は何であるか。それはイデオロギーのつきるところ、そしてイデオロギーのはじまるところ、その地点に集中しているのである。彼が「おれはやるのだ。やるといつたら、やるのだ」と酒場の口舌のようになりかえず、そこに鍵があるのだ。「やる」ことが労働者の自己目的であり、それは「昨日やった」でもなければ「今日やる」でもなく、「明日やるだろう」でもない。「やる」ことによつて、やるために、「やる」といふ動詞の原形としての「やる」である。<sup>(5)</sup>

しかし、このようなレトリックは理解が難しい。何のために何をやるかという内容のない「やる」は無意味であ

るともいえる。谷川独特のレトリックであろうが、「絶対民主主義」という言葉にしても、政治体制の意味を越えた過剰な意味づけが与えられているともいえる。しかし、政治への過剰な意味づけは、行動の具体的な対象と内容の欠落と表裏である。対象のない行動はどこにも根付くことはないだろう。

結局、谷川はコンミュニョンの根づく場所を求めながらも、労働者運動を生活の場に根付かせることはできないまま運動から追放される。運動のなかで明滅したかにみえた場所をもったコンミュニョンは、霧の中に消えたというほかない。

## おわりに

谷川が詩で表現した「村」や「故郷」あるいは「コンミュニョン」は、いずれもまだ見ぬ共同体を指し示しており、民衆の生活の奥底にある原基を示している。これまで述べてきたように、谷川にとって詩はこれから現れる根源的力の表現であるが、それが生まれるのは、すでにある民衆の生活の中からである。谷川の詩が多用するメタファーは、ルーティン化した日常性のベールをはぎ取り、その奥にあるエネルギーを表現することを目指している。本稿では、日常性を「いまここ」を基軸とした生活という観点日常生活の意味の曖昧化という視点から捉えた。「いまここ」という場の存在は、自らの意欲によって場所の改革という関心を惹起することを可能にする条件である。日常性とはルーティン化した繰り返し返しの現場であると同時に、自らの行動によって変えることのできる生活圏でもある。日本において一九七〇年代に強調された日常性の課題は、日常性に根づいた運動のあり方の模索であった。しかし、日常に根づいた運動とは何か。

本稿でみてきたのは、日常性に根づくということとは、どういうことなのかという問いであった。本稿で谷川をえて日常性という観点から考察したのは、谷川の挫折は、この日常世界のもつ規定力を炙り出すことになるからである。大正炭鉱での闘争では労働運動の形態に注目が集まるが、本稿では谷川の模索は、コミュニティの場所を求めた闘いであったということを強調した。コミュニティが成り立つ場所をもつことができなかったこと、これが谷川の闘いが敗れ去っていく原因であった。谷川が詩において見出した根源のエネルギーはあったかもしれないが、それが顕現することはなかったといえる。「メシを食う」ことを基軸とした日常世界は、革命と一致することはなく、むしろ革命とメシとの乖離において、谷川の論理が通用しなかったことを示している。その最大の原因は日常生活が階級意識を成立させる場ではなくなり、意味の分散化と意識の分散化によって曖昧な空間となってしまうことではなかったか。家庭は家庭、余暇は余暇、労働は労働というように分離してしまえば、階級の論理が日常生活全体を貫くことは困難である。谷川の挫折の背景にはこのような状況を見てとることができるのではないか。闘いの真の相手は資本の権力でも国家の権力でもなく、日常生活の強固な論理であったといえる。

もっとも、一九七〇年代は住民運動の時代となり、場所の問題はさらに深刻化する。公害問題等もあり、地域という場所を守ることは、民主主義の帰趨にかかわることでもあるという意味を帯びてくる。石牟礼道子が水俣に自身の活動の基盤を据え、そこから開発政治と現代文明を批判するのは周知のとおりである。谷川になくて石牟礼にあったもの、それは自らがよって立つ場所である。抽象的な理念は具体的な現実の中でのみ意味をもつ。「エネルギー」や「根源」、「原点」などという言葉は、それが根づく場所を必要としたのである。

宮本常一は、先の高島編の本の中で、次のような印象を記している。それは、かれが昭和初期から農村を歩いて回ってきて、昭和三五年（一九六〇年）くらいを境に大きな変化を感じたというのである。その変化とは、農村の



人びとが、自らの農村に大きな関心を寄せなくなってしまう、自分の子供には後を継がせたくないという人が増えたという印象である。宮本は、その変化は、農村の人びとが自分たちの村を良くしようという行動をしなくなってしまうことと表裏の関係で語っている。<sup>(48)</sup>自らの世界に関心を寄せるといふ日常的世界が大きな変質を受けたのではないだろうか。この変化こそが実は日常世界の曖昧化の帰結であり、根本的な変化をもたらしたのではないだろうか。この問題は稿を改めて論じたい。

注

- (1) 谷川雁「詩人とは何か」『原点がある』潮出版一九六三年、所収
- (2) 伊藤洋典「『村』的共同体論の本質と意義—谷川雁と石牟礼道子」『熊本法学』第一五四号、二〇二二年。
- (3) 中森美方「谷川雁論—工作者の負荷」七月堂一九八三年一三頁参照
- (4) 吉本隆明『詩とはなにか』思潮社二〇〇六年一四頁
- (5) 同、『政治的知識人の典型』、四・七吉本隆明講演会実行委員会、一九七三年
- (6) 高島通敏編『日常の思想とは何か』一九七〇年
- (7) 筆者は以前、高島通敏と松下圭一を谷川雁と比較したことがある。参照、伊藤「高度成長期における政治学の二つのパラダイム—疎外論との展開と交差—」『熊本法学』
- (8) 中森前掲二四三頁
- (9) フッサール(細田恒夫・木田元訳)『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、一九七四年、六九頁。
- (10) 同右、九七頁。
- (11) シュッツを中心として日常性を論じているものとして矢谷慈國「生活世界の社会学」『追手門学院大学人間学部紀要』

一九九七年第五号参照

- (12) アルフレッド・シュッツ『生活世界の構造』ちくま学芸文庫二〇一五年四三頁
- (13) アンリ・ルフェーブ(奥山秀美訳)『日常生活批判』一、二 現代思潮社、一九六九年、一九七〇年、第一巻、一三頁及び二四頁。
- (14) 同右、二五四頁。また一九七、二一七頁も参照。
- (15) 戸坂潤『戸坂潤セレクション』ちくま学芸文庫、七二頁、二二〇頁。
- (16) 高島「日常の思想とは何か」『日常性の思想とは何か』前掲、四六頁
- (17) 安藤将丈、世界思想社、二〇一三年。ちなみに安藤と同趣旨の主張をしているものとして次を参照。 See, Robert Peckanan, "Japanese Dual Civil Society: Members without Adroccates", Stanford University Press, 2006.
- (18) 入澤美時「夢見る革命家―谷川雁はどこに行ったか」『現代詩手帳 よみがえる谷川雁』二〇〇二年四月八八頁。
- (19) 『詩と思想の自立』思潮社一九七〇年一一六頁
- (20) 谷川雁『原点が存在する』前掲、一六〇頁。
- (21) 北川透、前掲一一六頁
- (22) 谷川雁、前掲、一六〇頁
- (23) 谷川雁、詩集『大地の商人』一九五四年所収
- (24) ちなみに、内田隆三は、唱歌「故郷」について、それが空間の抽象性、すなわち具体的な内容がない空間が現実のものとなったことを前提として作られた歌であることを指摘している。内田隆三『国土論』筑摩書房、二〇〇二年、六七頁。
- (25) 北川前掲、一一八頁。
- (26) 吉本隆明は「軋み」という短い文章において、この谷川の詩を「地方の炭坑地帯にすみ、政治的活動をしていると、大都市はどうみえるか。谷川雁の「東京へ行くな」という詩をよむとよくわかる。そこには理解されることを拒み、同時に無限の恨みだ

けは確かに都会に伝えてやろうという執念に似たものがある」として、この詩を東京対地方という構図で捉えている。吉本隆明『吉本隆明全集六』晶文社、二〇一四年、四〇七頁。初出は『現代思潮社NEWS』一九六一年七月、第三号、現代思潮社発行。

(27) 谷川雁『原点が存在する』所収、二二七頁

(28) 同右、二二八頁

(29) 同右。

(30) 同右、二二〇頁

(31) 谷川雁「地方―意識空間として」『影の越境をめぐって』潮出版社、一九七七年、八〇頁。初出は『思想』一九六三年、四月号。

(32) 谷川雁、『原点が存在する』前掲所収、一二二頁。

(33) 谷川「農村と詩」、同右所収一二四頁。

(34) 谷川、同右、一二五頁。

(35) 中森は、谷川の思想が現代的な意義を失ったのは、その民衆像が時代と合わなくなったためと述べていたが、それはそのとおりであろうが、本稿では谷川の先鋭化した民衆像においても、やはり「場」が必要であり、民衆が存在する「場」をどのように確保できるかが谷川にとって大きな問題であったということを強調したい。

(36) 伊藤洋典、前掲参照。

(37) 谷川雁『戦闘への招待』現代思潮社、新装版一九六九年（初版一九六一年）、一九五頁以下参照

(38) 木原滋哉「対抗的公共圏の構想と実践―「サークル村」から大正闘争へ」『興工業高等専門学校研究報告』第六八号、二〇〇六年参照。また水溜真由美「谷川雁と三池闘争―「定型の超克」を中心に」『谷川雁・詩人思想家、復活』KAWAD E道の手帖、河出書房新社、二〇〇九年、一二四頁以下も参照。

(39) 『行動隊ニュース』第三九号、一九六二年三月三日

(40) 木原前掲論文参照

- (41) 谷川雁『無の造形―六〇年代論草補遺』潮出版、一九八五年、九〇頁。初出は『現代思潮社NEWS』第三号、一九六一年。
- (42) 森崎和江『闘いとエロス』三一書房、一九七〇年、二七八―二七九頁。
- (43) 谷川雁・藤田省三対談「黙示録の響き」『現代思想』二〇〇四年、二月号（初出は、『思想の科学』一九六三年、一月号）。
- (44) 闘争の分裂については、森崎和江、前掲、二七九―二八一頁。
- (45) 谷川「定型の超克」『民主主義の神話』現代思潮社、一九六〇年、所収。
- (46) 谷川「三池の死者たちを撃つために」『無の造形―六〇年代論草補遺』前掲、二五五―二五六頁。
- (47) 同右、二五六―二七頁。
- (48) 宮本常一「生活から何が失われたか―古きよきものの意味」高島編『日常の思想』前掲、五二―六六頁。（初出は、『展望』一九六八年六月号）